川崎医療福祉学会誌　Vol. 25　No. 1　2015　1－12

総　説

ドイツ・ディアコニー事業団に関する日本国内の研究について

梶原直美[*1]　岡本宣雄[*2]

要　　約

本稿は，ドイツ・ディアコニー事業団に関する日本での研究を概観したものである．それは，日本でも重視性が認識されてきた，ケアにおけるスピリチュアリティを，ディアコニー事業団が体現していると考えられるからである．論述内容としては，まず事業団の概要に触れた後，事業団の理念，実践，および理念を実践へと結びつける教育について，日本における既存の研究を提示した．その結果，既存の研究について，以下のことが明らかとなった．

A. 理念としては，聖書に基づく隣人愛を基本に，それを歴史のなかで貫く努力がなされてきたことを確認する研究が多く見られた．

B. 実践面では，古代からそれに関わってきたディアコニッセたちに関する研究がなされていたのと同時に，現在のディアコニーの実践に関しては，現地を訪れ，調査した結果から，ディアコニーの意味に近づくべく，より一層対象者を中心とするケアへと努力がなされているとの報告が確認された．

C. 教育面では，ディアコニー事業団のプログラムに参加するなかで，国内に留まらず，各地でディアコニー実践を可能にするための様々な試みがプログラムとして提供されていることが報告されていた．

これらの研究内容から，以下のことを結論として提示した．

1. この事業団の根底にある精神は，イエスを模範としたキリスト教の隣人愛である．

2. ここでのケア実践には，奉仕者としてのディアコニッセおよびディアコーンの在り方が重要であったが，状況が変化した現在，教会の統括と人々の協力がこれを支えている．社会構造の異なる日本でこれを実践するには，地域の協力も必要であろう．

3. ケア実践のために重要なのは援助者の力であり，その涵養のために，教育は不可欠である．ディアコニー事業団の教育に関する日本の研究は希少であるが，ここに学ぶべき課題があるのではないか．

1．序

本稿は，フォン・ボーデルシュヴィング財団ベーテル（v.Bodelschwinghsche Stiftungen Bethel. 以下「ベーテル」と表記）に代表されるドイツ・ディアコニー事業団（Diakonisches Werk der EKD e.V. 以下「ディアコニー事業団」と表記）に関して日本でなされてきた研究の概要について論じる．

この研究の背景は，日本の福祉現場の現状にある．超高齢社会や大災害などに直面するなかで，ケアや援助を必要とする人々のスピリチュアリティという側面が注目され，重視されるようになってきた[†1)]．2011年には介護保険法の関係機関が「質の原則・尺度」を目標に掲げているが，そこにおいては宗教的ニーズへの配慮が含まれている[1)]．スピリチュアリティは宗教性とも換言され得るものであるが，単に宗教の違いや文化の違いに左右されず，その根底での超越者との関わりにおいて横たわっているものである[†2)]．日本において，たとえばホスピスにはチャプレンが置かれ，霊的ケアが展開されているが，それはホスピス以外の広範囲にわたっているとは言え

＊1 神戸女学院大学（非常勤講師）
＊2 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　医療福祉学科
（連絡先）梶原直美　〒662-8505　西宮市岡田山4-1
E-mail : lindenbaum07@gmail.com

ない．ゆえに，福祉現場においてはスピリチュアリティへのアプローチを視野に含むケアの在り方を模索することが肝要である．

ディアコニー事業団は，このようなスピリチュアリティが実践の基盤に据えられている福祉現場の一例として挙げられる．ここでは，宗教性が人間存在の根底において必要かつ重要なものであると理解され，様々な形でケアのなかに体現され，それが今日まで継承されてきたからである．ゆえに，日本でもこの事業団について研究されるようになった．

以上のような現状を踏まえ，本稿は，福祉ケア実践を支える当該事業団の精神性，ケア実践をめぐる評価と可能性，事業団に関する日本での研究課題について提示することを目的とし，ディアコニー事業団に関してなされた日本の研究を概観する．

２．ディアコニー事業団に関する前提

まず，本稿が研究対象とするディアコニー事業団に関して，事業団自身のウェブサイトにおける叙述を参照し，簡単にその概略を述べる．

ディアコニー事業団は，1848年，神学者 J.H. ヴィヘルン（Johann Hinrich Wichern, 1808-1881）によって設立され，1849年には「ドイツ福音教会内国伝道中央協委員会」（Central-Ausschuss für die Innere Mission der Deutschen Evangelischen Kirche）と命名された．それに先立って開設された，ハンブルクにおける児童および青少年の救済のための住宅では，ディアコニッセおよびディアコーン[†3)]への教育も行われた．1945年，前述の内国伝道中央委員会とは別に，「ドイツ福音教会援助事業」（Hilfswerk der Evangelischen Kirche in Deutschland）が発足したが，1975年には両者が併合し，「ドイツ・ディアコニー事業団」（Diakonisches Werk der EKD e.V.）として現在の組織となった．そして現在は，ドイツ国内において，カトリック教会によるカリタス連盟，労働者福祉事業団，ドイツ赤十字，ドイツユダヤ人福祉事業団，ドイツ諸宗派福祉事業連盟という五つのグループとともに，国家が認定する連邦任意社会福祉協会を構成する団体のひとつとして位置づけられる．ディアコニー事業団はプロテスタント教会系の福祉事業機関として，貧困，傷病などの苦難を抱える人々の支援を行ってきたが[2)]，現在，その働きは病院，高齢者施設，看護および介護者養成学校，託児所，宿泊所，古物交換所，結婚相談所，女性民宿，青少年カフェ，薬物中毒者救済センター，刑囚保護事業，など，多岐にわたり[3)]，ドイツ国内2010の施設がその活動の拠点となっている[4)]．また，ディアコニー事業団は最も新しいテーマとして，“Integration”に代わる“Inklusion”を挙げている[5)]．この場合の“Integration”とはその対象となる困難な人々を異質な存在と見なし，援助しながらも社会から分離される在り方を，“Inklusion”とは彼らが社会のなかに取りこまれ，その共同体のなかで生きる在り方を意味している．すなわち，対象者の居住地，障がいの違いなどによって誰一人の排除者も出さないことであり，障がいを持っている人々の自由な意志を尊重し，必要を満たしていくことを意味する[6)]．

当該事業団の名称である「ディアコニー」という語は本来，「奉仕」を代表的な意味とする“διακονία”というギリシャ語の独訳であり，この言葉には，新約聖書に示されている援助を要する人々への積極的な隣人愛を示すことが意図されている[7)]．また，「塵の中を通る」との意味を持つことから実際には塵の中に居ることを表すという理解や[8)]，主人に対する奴隷の「無私の給仕の心」を示すとの指摘もなされている[9)]．「ディアコニア」に関しては，人に仕える人間福祉を視座に据えて研究がなされるようになってきているが，聖書学の立場からの研究や[†4)]，ディアコニア学としての研究領域においても論じられている[10)]．

ディアコニー事業団は語源に見られるこのような意味を活動の根本精神として成立，存続させている．この語は現在，固有名詞として以外に，プロテスタントのキリスト教社会福祉活動一般をも意味するようになっている[11)]．聖書学，福祉一般，そしてディアコニー事業団は，ディアコニアという語のなかに共通する内容を持つがゆえに，研究対象として厳密に区別することは困難であるが，本稿では，何らかのかたちで「ディアコニー事業団」という固有の機関を視座に据えた研究を，論述の対象とする．

それに先立ってディアコニー事業団に対する評価について述べておきたい．ドイツにおいて，当事業団の活動は社会に対して量的にも質的にも大きな影響を与えているが，これはキリスト教会の奉仕を土台として成立していることから，キリスト教の精神である隣人愛に立つことの重要性と，しかし現実的にはその精神と教会における実践との乖離，およびそれが教育によって補完されるべきことが指摘されている[12)]．また，前述のような，困難を抱える人々に対して社会が Integration から Inklusion へとシフトしようとする方向性については，期待とともに評価がなされている[13)]．

日本においては，ディアコニー事業団の，なかでもベーテル施設における実践について，その多様な働きが国内に紹介されるとともに[14)]，福祉の在り方

に関する原理的な重要性が，とくにキリスト教の立場から指摘されてきた[15]．事業団を現地に訪問する研究者が増え始めるなか，2002年には大阪の社会福祉法人が，高齢者への時代に即した福祉活動を追求すべくディアコニー事業団への視察を行っている[16]．事業団の幅広い実践内容と歴史が評価されると同時に，その根底にある思想およびそれを支える構造体系が研究の関心の対象となっている．

３．ディアコニー事業団に関する研究の概観と傾向

以上，ディアコニー事業団に関する概略を確認したが，本項では日本におけるディアコニー事業団研究の概要について述べる．

まず CiNii で「ディアコニー」をタイトル検索すると51件，フリーワード検索で332件，全文検索では15件がヒットした. その代表的な施設である「ベーテル」を同様に検索すると，各々40件，2045件，80件であった. 関係のないものを除外し, 福祉施設ベーテルを含めてディアコニー事業団に関連する研究のみを抽出すると35件，これら以外に報告書や会議録などについては10件ほどの有用な研究が抽出された．

このなかで最も早くにこれを取り上げたのは，1954年，その2年前から出版され始めたキリスト教の一般雑誌であり，内容はディアコニッセに関してであった[17]．同時期，小児の精神衛生に携わる谷口によって，ベーテルに関する研究が発表された．これは研究というよりもむしろ, ベーテルに5か月間滞在した筆者の体験報告である．その体験は「心のいたむ苦しいもの」と表現されている．即ち，巨大化したコロニーのなかでディアコニッセらの古い習慣に違和感を抱いた筆者の，人柄のよい彼女たちにさえ機械的な印象を抱かずにはいられなかったことに対する問題意識が提示される論述となっている[18]．

門脇は1964年から1966年にかけてドイツでディアコニア活動を視察し，1977年以降，それについて研究，発表を重ねている[†5]．これらの研究はディアコニアの研究として日本では黎明期のものと言えるであろう．

その後の研究は1990年代にまで降る．坂本は，とくにミュンヘンにおけるディアコニー事業団について研究し，以後はディアコニアの意味探求や，ディアコニッセに関する調査により，社会福祉の根底思想と実践との関わりを考察している．同時期，河島はディアコニー事業団のなかでもベーテルに関する研究を，ナチスによる安楽死との関連において提示している[†6]．ここでは，当時の状況と特殊な状況下におかれた施設の困難となされた選択の意義が，詳細な経過の表記とともに述べられている．

2000年に入ると，ディアコニー事業団に関する翻訳の出版がなされるようになる．山城は，内国伝道を歴史的背景として形成されたディアコニー事業団に関するバイロイターの著作『ディアコニー共同体』[19] の翻訳を手がけ，広義のディアコニーに関する最も詳細な研究を日本に紹介したと言えるであろう[20]．また，橋本は2006年および2009年，写真や年表も含まれた，ベーテルに関する一般向けの著作を出版したが[21,22]，これによってベーテルはより身近なものとなった．同著者は2010年以降，ベーテルに関する幾つかの研究を発表している．

同時期から，ディアコニー事業団に関する研究は増加の傾向を辿る．その焦点は，歴史的見地から理念にアプローチする従来の研究の再考や，より実践的な社会事業としての施設の制度や機能に関するもの，ディアコニッセの姿勢から福祉や看護の在り方を考察するもの，また，教会の機能としてのディアコニア実現を視座に置いた研究など，現在の日本の福祉や教会の在り方を模索する方向性の窺える研究がなされている．

本稿は，以上の多様な研究を以下の三つの視点に立って考察する．即ち，第一には，ディアコニー事業団の働きを支える根拠を明示することを目的に，事業団の歴史からそこに貫かれている理念ないしは精神を扱う．第二に，その理念のもとに具体化されてきた実践内容について，実践の担い手や方法なども含めた研究に言及する．そして三つ目には，理念や精神を実践に結びつける，養成プロセスとしての教育について提示する．

４．ディアコニー事業団に関する研究内容

４．１　その本質について－歴史に見る理念と精神

ここではまずディアコニー事業団が設立される以前に遡り，その理念となる内容が考察されている研究を提示することから始める．なお，事象にはディアコニー事業団の様々な選択の結果が反映され，その選択の根底に理念が潜在するため，核となる本質部分にアプローチする研究を取り上げるにあたり，歴史的な流れを補って論述することにする．

ディアコニー事業団の歴史は, その理念に関して，ディアコニア思想そのものの出自にまで遡ることになる.「ディアコニア」は，前述のように，新約聖書に使用されている「奉仕」を意味するギリシャ語であるが，その語義はさらに旧約聖書まで遡って説明される．岡田によると，古代ギリシャにおいて奉仕は卑賤なもの，無価値なものとされていたが，旧約の時代には神から人間に与えられる義と憐みは人間が互いに分け合うべきものであり，人間にはその

実現としての奉仕が求められた．新約では該当する用語の解釈から，イエス自身によって示されたように，奉仕は無私の愛を与えたイエスを模範とし，体を使った具体的行為と理解されている[23]．つまり，人間はここから隣人愛の実践へと促されるということが理解される．また，白井は，愛，奉仕，援助といった内容について聖書的意味を提示し，ベーテルがそれを具現化する理念と実行力を持っていたことを示唆している[24]．

これらの精神は具体的なかたちを取りながら，古代，中世，そして近世と，福祉活動を担ってきた．ディアコニー事業団の歴史はこの延長上にある．門脇は前出の研究において，旧約の時代から21世紀に到る現在まで，「ディアコニア」の内容がどのように理解され実践されてきたのかを，社会的背景およびキリスト教の状況とともに提示しており，示唆に富んでいる．使徒教父の時代，興味深いのは隣人愛のあり方の変化である．門脇は，本来自発的であるはずの隣人愛が，罪障消滅思想の拡散と愛の奉仕が構造化されることにより，自由さを失っていったことを指摘する[25]．ここでその働きを担っていたのが，使徒時代からの担い手であったディアコーンおよびディアコニッセであった．それは組織的に修道院に持ち込まれることとなるが，困窮のなか，信徒たちに自発的な隣人愛の実践が見られたことも指摘される[26]．

宗教改革の時代，ルターの万人祭司の思想は，祭司としての奉仕職への任職としても理解される[27]．ルターがこの奉仕を，各自の職業を通してなされるべきものとしたことについて，門脇はその責任が教会にも帰されたことを指摘している[28]．ルターの正統主義は教条化を促進することとなるが，その反動から敬虔主義の流れが生じ，窮乏への対策が教会の義務として認識され，様々な福祉活動が盛んに行われるようになっていく[29]．

19世紀中葉，工業化に伴って労働条件が悪化し，貧困が増して社会問題となるなか，河島によれば，このときにプロテスタント教会が起こした社会福祉事業が「内国伝道」であり，のちに「ディアコニー」と呼ばれるようになるものである[30]．河島は前述のようにナチスに抵抗するベーテルの研究を提示しているが，それに先行して，内国伝道と関わりの深いヴィヘルンに関する研究も行っている[31]．ヴィヘルンは貧しい地域で日曜学校の教師をした経験のなかで労働者層の窮状を知り，社会変革の必要性を痛感，キリスト教の愛の精神による家族の形成を目指して「ラウエス・ハウス」を設立した．それが彼の活動の始まりである．河島によれば，ヴィヘルンは人々に魂の救済と福祉による救済の両側面の必要性を認識したのであり，それが国外宣教に対して内国伝道と呼ばれるものであった[32]．

1848年，ヴィヘルンは内国伝道の必要性を強く訴えて合意を得，その後，内国伝道中央委員会の設立に到った．19世紀の終わりには養護施設，保育所，女性救護施設，アルコール中毒者厚生施設，病院や療養所，宿泊所，救貧施設，労働者コロニー，ディアコニッセおよびディアコーンの養成所が存在し，すでに8000人以上の卒業生を輩出していた．

門脇は，ベーテルの誕生に寄与したF.フォン・ボーデルシュヴィング（Friedrich von Bodelschwingh, 1831-1910）牧師の来歴を辿り[33]，ディアコニアの本質を探ろうとする．彼の両親が信仰覚醒運動の影響を強く受けていたこと，ギムナジウムに通う頃，貧しい人々の存在に心を痛めたこと，また，霊的な体験をしたことのほか，門脇は三人の兄たちの死，肺炎によって彼自身に迫った死の危険性，その後の神学の学びのなかで，彼がディアコニア運動に触れたことの重要性を指摘している[34]．彼は以後も，身近な問題から取り組み続けるが，家庭を得，4人の子どもの父となったあと，子ども全員が病死する．そのほぼ3年後，招聘を受けてビーレフェルトに赴任する．彼はここで40歳から79歳までを過ごした．門脇は彼に，以下の四つの点を指摘する．即ち，その働く姿勢が神の愛，信仰，聖書に基づいていたこと，ベーテルに関して現在の病気を治すことでなく永遠を視座に据えていたこと，ディアコニッセ及びディアコーンの養成に積極的であったこと，そして，あらゆる人間を尊重したこと，である．このなかで，ディアコニッセたちに「身体と魂のケア」[35]が期待されていた指摘は興味深い．そして，そのようにして提供されるケアは，決して相手の自立を妨げるものであってはならず，それは「施しよりも仕事を」（Arbeit statt Almosen）[36]というボーデルシュヴィング牧師の言葉に表れている．なお，ベーテル設立の経緯や同牧師に関しては，橋本[†7]の研究も詳しい．

1929年の世界恐慌以後，混乱した社会のなかに誕生したナチス政権下において，ディアコニー事業団，とりわけベーテルの態度選択のあり方は特筆に値するものであり，それを巡る研究も複数存在する．たとえば数回ベーテルを訪問している今関は，そこに向けられる関心の理由を，「施設長はじめ職員たちが文字通り体を張って重度の障害者・患者の命を守った点にある」と説明している[37]．ベーテルにおける何がそのようなことを可能にしたのか．今関はそれを，施設関係者への聞き取りから，「最も小さ

い者の一人」という聖書の内容にあることを述べている[38]．つまり，悲惨な障害者たちこそが十字架で贖罪死を遂げたイエスの象徴であると理解するのである．同時に，今関は現在のベーテルに関して幹部たちの資質の高さを評価しているが[39]，当時もまた，施設長をはじめ，多くの施設幹部のそれぞれが前述のような理念を共有しそれを具現化していたのであろうことは，ナチズムへの先の抵抗姿勢から鑑みても容易に理解し得る．

このナチス政権下のベーテルについて，河島は，当時の教会に期待されていたのが社会変革ではなく信仰上の事柄のみであったこと，また，社会一般において優生思想に期待がかけられていたという背景に触れたうえで，刑法学者と精神医学者によって著された『生きるに値しない生命の抹殺の解除』に対する内国伝道委員会の態度に言及している．そこに設置された優生学専門協議会は，結果的にその著作に反対の姿勢を示すが，河島は，そこで病気や障害が罪の結果と理解されていたこと，断種が肯定されたことを指摘している[40]．また，山城は，自らが翻訳したバイロイトのディアコニー理解について，「ヒトラーの流れに加担していったディアコニーの自己批判に欠けている」[41] と述べている．これらのことから，この時期の危機的状況における施設のあり方には，さらに研究の余地の残されていることが示唆される．

なお，河島によると，その後のナチス政権下での障害者らの安楽死強制に対しては，当時のベーテルの姉妹施設の施設長 P.G. ブラウネ牧師が抵抗を示し，頼りにしたのがベーテルの先の施設長の息子で，施設長フリッツ・フォン・ボーデルシュヴィング牧師（Friedrich von Bodelschwingh, 1877-1946）であった[42]．このボーデルシヴィンクもまた抵抗を示したが，結果的に引き渡し，あるいは他院へ移送された患者ら計102人は犠牲となり，のちに彼はその罪責を表明することとなる．河島[43]，今関[44]らは，抵抗するさいのボーデルシュヴィング牧師の発言に注目している．それは，人間同士の交流は一方が損なわれていたとしても他方が補うべきものである，という彼の姿勢の表明であった．河島は，施設側の問われるべき点を明示しながらも，圧倒的な力に支配される時代のなかで，それぞれの施設が弱さを抱えながらも力を尽くしたことを評価すべきであるとし，そこに貫かれているのが信仰であることを示唆している[45]．

白井もまたディアコニーが組織化される歴史を辿ったうえでベーテルにも詳細に言及し，ベーテルの「生活と労働の基本諸原則」を取り上げ，これがベーテルのアイデンティティ継承のために必要であったことを指摘する[46]．このようなベーテルの働きを通して，白井は，聖書に支えられた愛の実践の伝統に注目している．

以上，とくにベーテルに関する研究が目立つが，そのなかの重要人物，フォン・ボーデルシュヴィング父子に関して，指摘せねばならないことがある．それは，父に「フリードリヒ」，子に「フリッツ」との名を充てている研究が多いことである．実際には，両者とも「フリードリヒ」なのであり[47]，「フリッツ」はその短縮形ないしは愛称である．同じ名は混乱を招きやすいが，混乱を防ぐ意図のもと，子に「フリッツ」を充てるのであれば，その事情を明記することが必要であろう．

ディアコニー事業団は現在，19の州連盟から成っており，同じくプロテスタント教会による「世界にパンを」（Brot für die Welt）という機関と共働しているが[48]，日本においてこれに関連する研究は殆ど見つけるに至らなかった．

現在，欧州の多くの国においてもディアコニー事業団と同様の組織が形成されており[49]，1996年にエキュメニカルな団体[†8]として設立された「ユーロディアコニア」（Eurodiakonia）には，ドイツも含め，2015年3月末現在，24か国，42団体が名を連ねている[50]．

なお，これらに共通するディアコニアの今日的意義と課題を，岡田は，愛の行動としてとりなしの祈りを捧げること，現実のなかで癒しと和解へ援助すること，世界の構造を愛と正義に変革させること，相互に仕えあうこと，霊性を通して愛することを促すこと，といった点を挙げている[51]．

ディアコニー事業団に関する研究の多くが，以上のように，ディアコニー事業団の，名称や組織が存在する以前からの成立までの経緯やその働き，そしていかなる精神性がそれを貫いていたのか，ということに関してである．

では，実際の奉仕活動の内実はどれだけ周知され，どのように理解されているのか．次の項では，ディアコニー事業団における実践者および実践内容に焦点を当ててなされてきた，日本における研究を辿る．

４．２　その実践について－ケアの実践者，対象者および施設等

ディアコニー事業団によれば，現在約45万人のスタッフと70万人のボランティアが就業している[52]．当該事業団の設立の経緯や理念に関しては，前項で確認したように，徐々に研究が重ねられてきたが，具体的な実践内容に関する研究はあまり多くはない．そのなかで，ディアコニッセに関するものが最

も多く，複数挙げられる．

まず，「ディアコニッセ」という語で示される内容の理解について述べておきたい．それに対する日本語は様々で，「看護師（婦）」「奉仕女」あるいはそのまま「ディアコニッセ」など，様々な表記が見られる．また，「ディアコニッセ（修道女）」[53]とされていたり，「修道女ではない世俗の女性であるが，キリスト教と看護技術を学んで介護施設や病院内に居住し，患者の看護にあたった女性（≒看護婦）」[54]とも説明されている．医学研究者の泉は，イプセンの文学作品で使用されていた“Diakronissen”という語を「ディアコニッセ」と理解し，内容に関心を持って調べたところ聖書のギリシャ語にまで遡らねばならず，考察が容易でなかったことを述べている[55]．この点におけるディアコニッセの研究はあまり見られない．

実際のディアコニッセ個人を対象とする研究としては，坂本が，ひとりのディアコニッセについて，その生活史の分析により彼女の持つ福祉思想を明示しようと試みている[56]．対象となったのは，1953年にドイツのディアコニー事業団から浜松の聖隷福祉事業団へと派遣されてきた5人のディアコニッセのうちのひとりである．坂本は彼女の特徴として，五つの基本姿勢を挙げている．それは，坂本の言葉をそのまま引用すると，1. 受容・傾聴，2. 自立助長・自己決定，3. 代弁，4. 責任感専門性・使命観，5. 共生・共働，である．そしてそこに，小さい者と共にいるという人間観，神への絶対的信仰を持つという宗教観，みことばを土台にして働くという職業観，キリストのように仕えるという福祉観を提示している．そしてここに，自他ともが喜びを得ることができるという側面を指摘している．ただし，先のディコニッセは，派遣されてきた日本ですでにディアコニアがなされているとの印象を抱いていたということから，これがディアコニー事業団のディコニッセにのみ特徴的であったのかどうか，断定することはできない．

なお，坂本は別の文献で，制服を着用することに関する二つの意味について述べている．それは，神との約束の証し，また自身の立場の表明として理解されている．すなわち制服は，奉仕者の匿名性を打破し，援助行為者であることを表明できるということである[57]．ここに，自他に対する奉仕者としての証し，という側面を見ることもできるであろう．

ディアコニッセについては看護史の視点からも論じられている．田村は，近代看護の祖と称されるナイチンゲールが，ドイツの母の家（Mutterhaus）で看護学を学んだことに照らして，ディアコニッセ運動という視点からドイツ看護史の復元を試みている[58]．そこにおいて，現在の看護教育のルーツが1834年，カイザーズヴェルトに創られた世界最初の母の家にあると考えられている[†9]．田村によると，ディアコニッセたちは修道女とは異なり，一生を神に捧げる義務はなく，技術を身につけたあとは結婚も可能で，母の家への滞留も自由であった．彼女たちが母の家で看護教育を受けるという体制は，時代を経て，ディアコニッセではなく看護婦と呼ばれる職業婦人の養成へと変化していく．一方で，低賃金で老後保障も不十分なままであったディアコニッセたちに処遇改善を訴える者も現れたが，同時に彼女たちに保守的な生活を期待した．キリスト教の歴史において生じたディアコニッセたちが，看護を担っていくなかでやがてキリスト教精神を排除されかねない状況に置かれていたこと，しかしディアコニッセたちは看護にキリスト教の精神が不可欠であると主張したことは興味深い．

ディアコニー事業の現状と財政に関しては，1991年から1993年にかけて，バイエルンの事業団を対象に，坂本が報告している．ここでは，1990年の時点でのディアコニー事業団全体の統計，変遷，職務分野と，バイエルン・ディアコニーの目的，業務分野，メンバー，組織，組織の位置づけ等が提示されている．これを概観すると，業務分野が極めて多岐にわたっていることが明白である．そこでは，事業団の運営領域を除けば，教育，教会の社会活動，世界を対象とするディアコニーが挙げられており，教会が活動の主担者であること，その働きは外国人や亡命者，避難者に及ぶものとなっている[59]．また，ディアコニー事業団は民間事業団であり，費用の問題も生じるはずである．坂本は，事業団自身が10% 以上を負担すること，それ以外は国からの措置費や助成金，教会税からの助成金や補助金によって運営されていることを報告している[60]．

ほかには，高齢者福祉事業の改善を目的に，ディアコニー事業団への視察内容を含む調査報告が提示されている[61]．これは大阪の複数の福祉研究者らによるものであり，ブラウンシュヴァイクにあるディアコニー施設の訪問によって多くのデータが収集され，日本における高齢者福祉の在り方が検討されている．その結果，課題として以下のような九点が挙げられている．即ち，1. 自尊心の尊重とコミュニケーションの充実，2. 家族への支援の再検討，3. 地域における社会福祉法人施設の位置づけの考察，4. 時期に応じたミッション追及，5. サービスの質の確保，6. 利用者の権利保全，7. 個人の尊厳と価値に基づくサービスの提供，8. 介護保険制度の外側にあるニー

ズの充足，9.公的財源としての介護保険の再認識，である.データ自体は十年以上も前のものであるが，画像も含め，ディアコニーの施設に関する具体的な資料は充実している.

また，橋本[62]，岡田[63]も，おもにベーテルとその近郊を対象に，具体的な実践について述べている.

以上のような研究は，ディアコニーが重視しているものを再確認させ，それをどのように具現化しているか，また，新たな工夫について認識を与えるが，他方，課題の提示はあまりされていない.

４．３　本質から実践へ－方法としての教育

具体的実践に関する以上のような研究が見られるが，理念をこのような実践に結びつけるためには，実践者に理念そのものを伝え，理念に対して実践者が理解して自らの考えを構築し，実践者が実践の方法を習得する，といった段階ごとに教育の機会が必要となる．本項では，ディアコニー事業団の教育に関する日本国内の研究を概観する.

前出の岡田は，2007年，ドイツ・プロテスタント教会奨学生としてのホフガイスマル牧師研修所での体験とともに，提供される教育について述べている.受講した科目のひとつである「教会理論」には，ディアコニーを視野に，教会形成と教会指導の基本的能力の養成が目標とされており，岡田は牧師がディアコニーについて学ぶシステムがドイツにはあると述べている．そして，「教会理論」の三つの課題，即ち「現状を真実に受け止め，教会的視点でこれを判断し，実践する」ということに向き合い，自己を問い直すことが，ディアコニーの視点を反映させるために重要であり課題であると結論している[64]．ディアコニーに関する教育内容について，日本国内での研究が稀有のなか，この内容は具体的なものとして興味深い.

また，2012年の冬に10日ほどベーテルを訪問したさいの報告もなされている．そこでは，前項で述べた「施しよりも仕事を」の理念が，各部門において息づいていることが指摘されている．たとえば，プロヴェルク（proWerk）という部門では，職業訓練，障がいを持つ人々のための作業所，企業との接触を生み出す統合専門業務部門，労働市場計画，自発的に行動する有限会社の五部門に分かれ，ここで人々は障がいの有無に関わらず仕事の責任を担い，お互いに尊敬し合い，喜びをもって当たり前の社会生活を送るのである[65]．ベーテルではこのように労働によって社会参加をめざし，そしてそれを知る世界各国から献金が捧げられている．これは実践報告であるが，教育としての意味も大きいため，この項目で述べた．つまり，このような施設のあり方をとおして，障がいの有無，施設の内外に関わらず，どのような可能性があるのかに気づけるということである.

そしてさらに，三つのプログラムに関して言及されている．まず，アフリカ，アジア，ドイツの三十四教会が合同したミッション福音宣教連合（VEM）では，プログラム提供，学び，仕えることを理念に，訓練や継続教育，福音宣教，奉仕，奨学支援がなされており，互いに支え合うためのパートナーシップが重視されている．二つ目に，ベーテル教会立神学校では2年間の「ディアコニー・マネージメント課程」が開設され，それぞれの地で働くために希望の場所で神学的，経営的，経済倫理的マネージメントを学び，学位も取得可能となっている．三つ目は，ミッション･ディコニー･センター（MDC）であり，ここでは神学と経営のマスターが目標となる．これらのディアコニー教育に共通するのは，神学のみならず経営面も視野に入れた広がりの側面，継続教育を目指す長さの側面である．これらは現在，実際にプログラムとして実践されている．なかでも，現地において働くために現地において教育を受けられる体制は，まさに対象者の立場に立つ工夫であると言えよう.

これ以外には，ディアコニー事業団の生と死に関する教育について，岡本らがヘッセン州の事業団を対象に調査している．ここでは福祉専門職の養成教育について，具体的な項目が挙げられている[66]．それによると，福祉の分野に関わる場合には「社会教育士」（Sozialpädagoge），「ソーシャルワーカー」（Sozialarbeiter）などの資格が必要であり，専門学校や大学での修業後にこれらの国家試験に合格し，就職するが，そののちも教育は継続され，職業経験とともに課程修了者が専門職として働く条件となっている．いのちの教育に関しては，宗教や教育学，心理学などを，講義およびフォーラムによって学ぶ．そこでは，ユダヤ人のホロコーストに関する議論も含まれている．このようなかたちで，いのちとの向き合い方について過去を想起し，問い直す作業も行われている.

４．４　まとめ

以上，ディアコニー事業団に関する研究について概観した．この事業団そのものを対象とする研究はまだあまり多くないが，ディアコニー事業団，あるいはその大きな枝であるベーテルの，設立の背景や設立者，ナチス政権下における施設の在り方などが研究対象とされる傾向が強かったと言える.それは，すでに述べたように，ここにディアコニー事業団の理念が示唆されているからであると考えられる．これらによって確認されたことは，ディアコニー事業

団がディアコニアの精神を理念として大切にしてきただけでなく，その精神により，実際に隣人愛に基づいてケアを提供し，人を育て，人に仕える奉仕団として世の中に具体的に証ししてきたということである．それは，ナチスの恐るべき政策からも社会的弱者たちを守ったベーテルの歴史によっても代弁されることであり，目立って表面には出ないディアコニッセたちの日々の働きのなかにも見られることであろう．その視点から考えると，ディアコニッセに関する研究もまた意義深いものになるはずである．他方，ディアコニー事業団は教会が主体となって国内に留まらない奉仕を捧げてきたのであり，信仰をもちながらもそれによって自己を制限せず，開かれた働きへと自らを投入したことは，ディアコニアの本質の現れと言える．教会が生活の基盤にない日本では，組織的な課題が生じるが，隣人愛という人間の本質に関わる共通項は，多様な実現の可能性を含むものであろう．

5．結

以上，ディアコニー事業団に関する日本での研究について概観してきた．

まず，この事業団の存在および活動を支えているものはイエスを模範としたキリスト教の隣人愛に基づく奉仕であったということが言える．この精神性については多くの研究が言及していた．これは，かつてナチスから入居を守ろうとする施設の態度に顕著に表れているため，この状況下での施設関係者個人に関する詳細な研究も見られた．これらの研究からは，隣人愛の精神はケア実践者の人格において涵養されることが必要なのであり，それが，ディアコニー事業団およびそこにおいて提供される援助やケアを根底から支えているものである，ということが示唆される．

つぎに，ケアの実践に関しては，一方では援助者およびケアの対象者，すなわち「人」をめぐる研究が目立った．そこでは奉仕者としてのディアコニッセおよびディアコーンの熱心な働きとともに，彼らに備わっていた性質が明示されていた．ただし，時代背景も異なる現在に，当時のディアコニッセたちの在り方をそのまま持ち込むことで多くの実りを期待することはできないであろう．現在，ドイツにおいてディアコニッセたちは減り続けている．しかしながら、確かな体制のもと，教会がそれを統括し，職員やボランティアらがケアに携わるところへ献金も寄せられる．ここにも「ディアコニア」（奉仕）の精神を垣間見ることができよう．

しかし，これは日本で可能なのか．ドイツの教会のような役割を誰が担うのか．もちろん、日本の教会がこれを目指し，目標に掲げることには大きな意義があり，むしろ教会本来のわざの回復とも言えよう。ただ、現在の日本の教会は，規模的にも財政的にも，また何らかのかたちでそこに関わる人の数でも、ドイツの教会には及ばない．ここには社会の構造的な違いがある．大阪府社会福祉協議会がディアコニー事業団に関心を持ったように，もし地域が協力し合うことができれば，そこにも可能性が見いだせるかもしれない．

最後に，ケア実践のための日本における課題について述べておきたい．ケアを提供するためには施設や備品が必要になるが，それ以上に，援助者の存在が重要であるのは述べるまでもない．そして，援助者に対しては，教育が大きな力を持つと言えるであろう．ディアコニー事業団は，援助者のために様々な教育プログラムを用意している[67]．また，すでに確認したように，援助者の精神性の涵養はケア実践にとって重要である．日本では，ディアコニー事業団の教育に関する研究は希少であった．しかし，教育について，ディアコニー事業団から学べることは多くあるのではないか.これを今後の課題としたい．

本研究は,2013年～2015年度科研費基盤研究（C）「社会福祉におけるスピリチュアルな側面を鑑みたアセスメントツールの開発」課題番号25380820の助成を受けて行われたものである．

注

†1）木原活信：対人援助の福祉エートス－ソーシャルワークの原理とスピリチュアリティ．ミネルヴァ書房，東京，2003．第1章．が詳しい．なお，ここでの「ケア対象者」へのケアとはスピリチュアルケアを指す．スピリチュアリティとは，木原によると，「人間の核」となり「精神と身体とを結合させるもの」ある．（同，27.）

†2）岡本宣雄によるスピリチュアリティの定義，参照．岡本宣雄：スピリチュアリティを焦点としたケアのアプローチモデルに関する研究－パストラルケアにおけるアセスメントの研究史から．川崎医療福祉学会誌，**20**(1)，89－97，2010.

†3）それぞれ，女性奉仕者，男性奉仕者を意味する．

†4）たとえば，小林は「ディアコニア」が示す語義を新約聖書に求め，教会の働きにおける奉仕の位置づけを模索し

ている．小林信雄：新約聖書におけるディアコニア－munus triplex の一環として．神學研究，11，1－31，1962.

†5）門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流. キリスト新聞社, 東京, 1997. 筆者のあとがきによると，この著作は1977年から九州女学院短期大学紀要に発表していた複数の研究を基にしたものである.

†6）河島幸夫：ナチ＜安楽死作戦＞とボーデルシュヴィンク施設団ベーテルの抵抗．西南学院大学法學論集，**25**(1)，1－115，1992；同：ナチ＜安楽死命令＞とベーテルの抵抗．法学，**55**(6)，926－959，1992．などが挙げられる.

†7）たとえば，橋本孝：ベーテルが設立される19世紀のドイツ．富坂キリスト教センター紀要，2，49－56，2012；同．慈愛の人　フリートリッヒ・フォン・ボーデルシュヴィングの生涯と業績．富坂キリスト教センター紀要，4，11－21，2014．などが挙げられる.

†8）超教派の，プロテスタント教会のみならず正教会をも含む世界教会としての立場にある.

†9）これは現在，フローレンス・ナイチンゲール病院を併設したカイザーズヴェルト・ディアコニーとなっているが，その施設によると，1836年に創設されたと説明されている．“Geschichte”．Kaiserswerter Diakonie. **http://www.kaiserswerther-diakonie.de/de/ueber -die-kaiserswerther-diakonie/ueber-die-kaiserswerther-diakonie/kaiserswerther-schwestern-schaft/geschichte-der-kaiserswerther-schwesternschaft.html**（2015. 3. 20）.

文　　献

1）斎藤義彦：ドイツと日本「介護」の力と危機．初版，ミネルヴァ書房，京都，110，2012.

2）“Geschichte”．Diakonie Deutschland．**http://www.diakonie.de/geschichte-9081.html**（2015. 3. 20）.

3）コーラー ME 著，畑祐喜訳：奉仕活動の理論と実践－ディアコニー共同体．初版，新教出版社，東京，2000，230－231．（Edouard，Marc：*Kirche als Diakonie－Ein Kompendium－*．Theologischer Verlag，Zürich，1991；Diakonie，Neuklirchener Verlg，1998.

4）Diakonie Deutschland：“Alle Beratungsleistungen”．**http://www.diakonie.de/service-navigator.html?action=map&consulting=1&lat=&lng=&t=&e=&l=0&z=&r=50**（2015. 3. 20）.

5）Diakonie Deutschland：“Inklusion verwirklichen! Projekte und Beispiele guter Praxis”．**http://www.diakonie.de/media/Diakonie_Broschuere_Inklusion_verwirklichen.pdf**（2015. 3. 20）.

6）岡田仁：ディアコニーとミッション－ベーテルにおける新しき方向性．基督教論集，**56**，75－86，2013.

7）Diakonie Deutschland：“Selbstverständnis”．**http://www.diakonie.de/selbstverstaendnis-9005.html**（2015. 3. 20）.

8）阿部志郎：推薦の言葉．門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流．キリスト新聞社，東京，1，1997.

9）岡田仁：ドイツ・プレディガーゼミナールの方法と実際－ディアコニーと教会理論．富坂キリスト教センター紀要，1，70，2011.

10）熊澤義宣：ディアコニアの展開としての人間福祉学．聖学院大学論叢，**11**(4)，275－306，1999.

11）Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion hrsg.：*Duden Deutsches Universalwörterbuch*．Dudenverlag：Mannheim/ Leipzig/ Wien/ Zürich，397，2006.

12）コーラー ME 著，畑祐喜訳：奉仕活動の理論と実践－ディアコニー共同体．新教出版社，東京，434－442，2000.

13）Schablon K：Was können Fachkräfte dazu beitragen, damit Inklusion keine Illusion bleibt? Färber H, Seyfarth T, Blunck A, Vahl-Seyfarth E, Leibfritz J, and Mohler G eds. *Alles Inklusive!?: Teilhabe und Wertschätzung in der Leistungsgesellschaft*，61－74，2014.

14）畑祐喜：ドイツ連邦共和国のディアコニー．キリスト教社会福祉学研究，**14**，20－30，1981.

15）門脇聖子：21世紀のキリスト教社会福祉への提言．キリスト教社会福祉学研究．**34**，20－32，2001.

16）近畿老人福祉施設協議会，大阪府社会福祉協議会老人施設部会：社会福祉法人の新しいミッション・活動を求めて－ドイツの民間福祉団体「ディアコニー」の調査を通して（研究報告書）．2002.

17）ディアコニッセ運動と日本の教会．福音と世界，**9**(11)，13－26，1954.

18）谷口行子：BETHEL －重症心身障害者（児）のコロニー．青少年問題研究，**15**，74－80，1969.

19）コーラー ME 著，畑祐喜訳：奉仕活動の理論と実践－ディアコニー共同体．新教出版社，東京，2000．（Edouard，Marc：*Kirche als Diakonie－Ein Kompendium－*．Theologischer Verlag，Zürich，1991；*Diakonie*，Neuklirchener Verlg，1998.）

20）バイロイター E 著，山城順訳：ディアコニー－ドイツ・キリスト教社会福祉の歴史：「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」．ゆるり書房，長崎，2007．（Beyreuther，Erich，*Geschichte der Diakonie und Inneren*

Mission in der Neuzeit Gebundene Ausgabe. Wichern-Verlag, Berlin, 1983.）
21）橋本孝：福祉の町ベーテル－ヒトラーから障害者を守った牧師父子の物語．五月書房，東京，2006.
22）橋本孝：奇跡の医療・福祉の町ベーテル－心の豊かさを求めて．西村書店，東京，2009.
23）岡田仁：ディアコニアの概念について．基督教論集，**57**，127－141，2014.
24）白井進:キリスト教社会福祉の意義と課題－ボーデルシュヴィンク総合社会福祉施設ベーテルの歴史的意義に学ぶ．キリスト教社会福祉学研究，**40**，4－13，2007.
25）門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流．キリスト新聞社，東京，17－18；64－67，1997.
26）門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流．キリスト新聞社，東京，98－106，1997.
27）チェル・ノールストッケ著，橋本昭夫訳：人間、このかけがえのないもの－ディアコニアの基礎と実践．いのちのことば社，東京，35，2004.（Nordstokke, Kjell：Det dyrebare mennesket. Verbum Publishing House, Oslo, 2002.）
28）門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流．キリスト新聞社，東京，18，1997.
29）岡田仁：ディアコニアの歴史的変遷とその今日的意義．富坂キリスト教センター紀要，**4**，81，2014.
30）河島幸夫：ナチズムと内国伝道－ドイツ・キリスト教社会福祉の試練．キリスト教社会福祉学研究，**29**，5－6，1996.
31）河島幸夫：ヨハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン－文献紹介を中心に．西南学院大学法学論集，**6**(4)，65－93，1974.
32）河島幸夫：ナチズムと内国伝道－ドイツ・キリスト教社会福祉の試練．キリスト教社会福祉学研究，**29**，6，1996.
33）門脇聖子：ディアコニア史3－フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィングの生涯と思想．VISIO，**28**，1－14，2001.
34）門脇聖子:21世紀のキリスト教社会福祉への提言－キリスト教社会福祉の原点･ディアコニアを生きたボーデルシュヴィングに学ぶ．キリスト教社会福祉学研究，**34**，20－32，2001.
35）門脇聖子：ディアコニア・その思想と実践－愛の働きの源流．キリスト新聞社，東京，149－151，1997.
36）“Arbeiten in Bethel”. Bethel. `http://www.bethel.de/aktionen-projekte/werk-staetten-in-bethel.html`（2015. 3. 20）.
37）今関公雄：ベーテルのキリスト教福祉－ナチ安楽死作戦への抵抗と福祉実践展開．青山學院女子短期大學紀要，**51**，43，1997.
38）白井進:キリスト教社会福祉の意義と課題－ボーデルシュヴィンク総合社会福祉施設ベーテルの歴史的意義に学ぶ．キリスト教社会福祉学研究，**40**，11，2007.
39）今関公雄：ベーテルのキリスト教福祉－ナチ安楽死作戦への抵抗と福祉実践展開．青山學院女子短期大學紀要，**51**，43，1997.
40）河島幸夫：ナチズムと内国伝道－ドイツ・キリスト教社会福祉の試練．キリスト教社会福祉学研究，**29**，5－20，1996.
41）山城順：敬虔主義とディアコニー－『ディアコニーと近代における内国伝道の歴史』エーリヒ・バイロイター著の翻訳を通して．キリスト教社会福祉学研究，**40**，69，2007.
42）河島幸夫：ナチ＜安楽死命令＞とベーテルの抵抗．法学，**55**(6)，926－959，1992.
43）河島幸夫：ナチズムと内国伝道－ドイツ・キリスト教社会福祉の試練．キリスト教社会福祉学研究，**29**，16，1996.
44）今関公雄：ベーテルのキリスト教福祉－ナチ安楽死作戦への抵抗と福祉実践展開．青山學院女子短期大學紀要，**51**，47，1997.
45）河島幸夫：ナチズムと内国伝道－ドイツ・キリスト教社会福祉の試練．キリスト教社会福祉学研究，**29**，17－18，1996.
46）白井進:キリスト教社会福祉の意義と課題－ボーデルシュヴィンク総合社会福祉施設ベーテルの歴史的意義に学ぶ．キリスト教社会福祉学研究，**40**，4－13，2007.
47）Ruhbach G：Bodelschwingh. *Theologische Realenzyklopädie*，**6**，Walter de Gruyter，Berlin/ New York，744－747．1993.
48）“Verbandstruktur”. Diakonie Deutschland. `http://www.diakonie.de/verbandsstruktur-9134.html`（2015. 3. 20）.
49）阿部志郎，岡本榮一監修：日本キリスト教社会福祉の歴史．ミネルヴァ書房，東京，378，2014.
50）“Eurodiakonia Member Organisations”. EURODIACONIA. `http://www.eurodiaconia.org/ members/ list-of-members`（2015. 3. 20）.

51）岡田仁：ディアコニアの歴史的変遷とその今日的意義．富坂キリスト教センター紀要，**4**，83－87，2014.
52）Diakonie Deutschland：“Zahlen und Fakten”，**http://www.diakonie.de/zahlen-und-fakten-9056.html**（2015. 3. 20）.
53）今関公雄：ベーテルのキリスト教福祉－ナチ安楽死作戦への抵抗と福祉実践展開．青山學院女子短期大學紀要，**51**，55－56，1997.
54）田村直俊：ドイツ看護史の真相－1. ディアコニッセ運動の発展．埼玉医科大学短期大学紀要，**22**，1－10，2011.
55）泉彪之助：ディアコニッセという概念－特に初期キリスト教共同体との関連において．医譚，**91**，5899－5908，2010.
56）坂本道子：ディアコニッセ・ハニの福祉実践と福祉思想－今日のクリスチャン・ソーシャルワーカーのあるべき姿を求めて．キリスト教社会福祉学研究，**31**，10－19，1998.
57）坂本道子：キリスト教社会福祉の根底思想としての「ディアコニア」について．キリスト教社会福祉学研究，**28**，22－26，1995.
58）田村直俊：ドイツ看護史の真相　1. ディアコニッセ運動の発展．埼玉医科大学短期大学紀要，**22**，1－10，2011.
59）坂本道子：ドイツ民間社会福祉の現状－バイエルン・ディアコニー事業団の設立過程と活動内容．日本女子大学紀要．人間社会学部，**2**，251－262，1991.
60）坂本道子：ドイツ民間社会福祉事業団の財政－バイエルン・ディアコニー事業団の活動．日本女子大学紀要．人間社会学部，**4**，159－166，1993.
61）黒田研二他：社会福祉法人の新しいミッション・活動を求めて－ドイツの民間福祉団体ディアコニーの調査を通して．近畿老人福祉施設協議会・大阪府社会福祉協議会老人施設部会，2002.
62）橋本孝：奇跡の医療・福祉の町－ベーテル．西村書店，東京，2009.
63）岡田仁：ディアコニーとミッション－ベーテルにおける新しき方向性．基督教論集，**56**，75－86，2013.
64）岡田仁：ドイツ・プレディガーゼミナールの方法と実際－ディアコニーと教会理論．富坂キリスト教センター紀要，**1**，69－84，2011.
65）岡田仁：ディアコニーとミッション－ベーテルにおける新しき方向性．基督教論集，**56**，77，2013.
66）岡本宣雄，井上信次：ディアコニー事業団（Diakonisches Werk）における生と死の教育．川崎医療福祉学会誌，**18**（2），471－474，2009.
67）Müller-Schöll A：Diakonie Ⅴ．Ausbildung und Fortbildung，*Theologische realenzylkopädie*，**8**，Walter de Gruyter，Berlin/ New York，679－682，1993.

（平成27年６月９日受理）

On the Studies in Japan Concerning Diakonisches Werk der EKD e.V.

Naomi KAJIHARA and Nobuo OKAMOTO

(Accepted Jun. 9, 2015)

Key words : Diakonisches Werk, Diakonie, Bethel, Germany, Christianity

Abstract

This study is a review of the research done in Japan concerning Diakonisches Werk der EKD e.V.. The research shows that Diakonisches Werk has come to be recognized in Japan and that it embodies the spirituality of care.

This paper, after presenting a brief outline of the foundation, discusses the existing Japanese research concerning education linked to the ideas, the practices and the application of the foundations ideas. As a result, the following conclusions can be taken from existing research.

A. It can be seen from many studies that there has always been the effort throughout history to follow the Biblical idea of loving one's neighbor.

B. As for its practice, while research has been done on the practices of Diakonisse from ancient times, reports about the current practices of Diakonie from the results of visiting local areas and taking surveys indicate that care is provided that focuses more on the person and more closely approaches the meaning of neighborly love.

C. As for education, among the programs Diakonsches Werk is involved in, it was reported that many kinds of approaches are offered in order to make it possible to practice Diakone not in one country alone but in many others.

The following points are presented as conclusions from this research.

1. The spirituality at the root of this movement is the Christian love of neighbor patterned after that of Christ.

2. As for the practice of care, the Diakonisse as servants and their way of carrying out Diakonie had once been important, but in our modern times the situation has changed and it is church supervision and the cooperation of many people that provide the main support now. In Japan, where the social structure is quite different, local communities may have the power to practice this kind of care.

3. The power of the supporters of care is very important. Education is indispensible for such training. Japanese research on Diakonisches Werk is limited, but valuable ideas can still be gleaned from it.

Correspondence to : Naomi KAJIHARA Kobe College
Nishinomiya, 662-8505, Japan
E-mail：lindenbaum07@gmail.com
(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.25, No.1, 2015 1 －12)